

私立中高一貫校(男子校)の友人関係と学校適応 —異質な他者に対する意識とオンラインによる学校適応の改善—

学籍番号 209209

氏名 杉本智昭

主指導教員 水野治久

副指導教員 梅川康治

1. 背景

勤務校は私立の中高一貫校(男子校)である。少子化の中での生徒確保が喫緊の課題であり、そのため、より魅力のある学校創りを行いながらも、学校の評価として可視化しやすい進学実績を高めることを目的とし、2014年度にフロントランナーコース(以下、FR)とアドバンスコース(以下、ADV)という2つのコースからなる新コース制を導入した。FRは主に国公立大学に進学することを想定しているカリキュラムであり、ADVは主に系列大学に進学することが想定されたカリキュラムである。この新コース制では、生徒は中学の教育課程から(中学1年時から)コースに分かれて学び、中学3年間でFRが2クラス、高校のカリキュラムに海外留学が組み込まれているグローバル・スタディ・プログラム(以下、GSP)が1クラス、ADVが2クラスというコース・プログラム制が完成するカリキュラムとなっており、高等学校の教育課程から入学する生徒についてはADV(GSPを含む)を履修することとなる。

新コース制を導入するまで生徒同士の横のつながりがあったが、新コース制導入後はそのつながりが失われ、同じ学年であっても知らない生徒がいる状況となっている。このような状況から、各コース、プログラム内で友人関係が固定化されてしまっていることが懸念された。また、一部の系列小学校出身者の人間関係が固定化されていること、あるいは高校の教育課程では中学から在籍している内部生と高校から入学した外部生との人間関係が築けていないことが懸念されたため、現在のコース制での固定的だと思われる友人関係が学校適応にどのような影響を及ぼしているのかをリサーチクエスチョンとし、研究を行った。

2. 研究1

研究1では質問紙調査により同質性に起因する固定的な人間関係が学校適応に与える影響を明らかにした。具体的には2021年2月17日に勤務校の高校1年生195名を対象に、①「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート(以下、hyper-QU)」と②被異質視不安(異質な存在に見られることに対する不安)項目・異質拒否傾向(異質な存在を拒否する傾向)項目(高坂, 2010)からなる質問紙調査を実施し、それらの関連を調査した。

この調査の結果、学校適応をいじめ被害感がないことと捉えた場合、友人SMが低いほど、被侵害得点が高く、異質視不安が高いほど、被侵害得点が高いということが明らかとなった。この結果は、友人関係を良くすることでいじめ被害感を減少させることができるといえる。学校として友人関係を良くする意図的な取り組みが必要であることを示唆していると言える。また、従属変数を承認得点とした場合、かかわり合計が承認得点に対して影響を与えてお

り、学級SMと友人SMについても承認得点に対して弱い影響が見られた。このことから、かかわりが高い人ほど承認されており、学級SMや友人SMが高いほど承認されていることが示唆された。この結果から、勤務校において学校適応を高めるためには、かかわりのスキルを上げたり、学級、友人との関係をより良くすることが大切であることが明らかになった。系列小学校と中学、あるいは高校から入学してきた生徒の学校適応については、特に有意な差は見られなかった。クラス間では、GSPのA組（調査前年度（中学3年時）からほぼクラス替えをしていない、カリキュラムに留学が組み込まれているクラス）とADVのC組（系列の大学に進学している生徒が多く在籍し、高校からの新入生が多く在籍していたクラス）で友人SMと配慮スキルで有意な差が見られたため、内部生（167名）と外部生（28名）の人間関係が広がっていない状況がある可能性があると考え、内部生と外部生を比較するt検定を行った。その結果、有意な差ではなかったものの、内部生と外部生で承認得点とかかわり合計のグループ統計量の平均値に差が見られた。この結果は高等学校から新入生が所属するADVにおいて、内部生と外部生が人間関係を築くプログラムの必要性を示唆していると考えられる。

3. 研究2

研究1において、内部生と外部生の承認得点とかかわり合計で差があることから、内部生と外部生の友人関係を築き、学校適応を高めるために介入の検討を行った。この介入の準備として、倫理委員会の承認（承認番号21087）を得て、外部生が在籍するADVのB組とC組（計84名）において、詳細なニーズを調査するために2021年12月にhyper-QUを行った。その結果、B組ではかかわり、C組では配慮に関して課題があることが明らかになった。そのため、かかわりと承認を高めることを目的とし、対面で朝の時間の10分間（2回）と授業時間（1回）、およびオンラインの授業後に10分間（6回）のSGEのエクササイズを行い、介入後にhyper-QUを用いて効果測定を行った。その結果、承認得点と被侵害得点において、有意な差が見られ、事後の得点が事前の得点より有意に高いことが示された。このことから、対面だけではなく、オンラインでの介入であっても、生徒の学校適応を高めることができることが示唆された。

4. 実践的意義

本研究では、コース制により固定的だと思われる集団を形成することが学校適応にどのように影響するのかを検討した。その結果、友人SMが低いほど、被侵害得点が高く、異質視不安が高いほど、被侵害得点が高いということが示唆された。このことは友人関係を築くきっかけをカリキュラムの中で計画的に組み込むことの重要性を示唆していると言えるだろう。

また、本研究では、学校適応について系列小学校とそれ以外の生徒との違いは見られなかったが、調査を行った時期が友人関係の質が変わる高校であったことも一因であるかもしれないため、今後、中学時での同様の調査が望まれる。クラス間の調査に関してコロナ禍であったことも影響していることが考えられるが、新入生が在籍するクラスにおいて、カリキュラムの中に学校適応を高める活動を組み込む重要性が示唆された。また、かかわりと承認を高めることを目的として介入（対面とオンラインによるSGEのエクササイズ）を行った結果、承認得点と被侵害得点に有意差が見られた。このことは、オンラインでの介入であったとしても、SGEが生徒の学校適応を高める働きがあることが示唆された結果と言えるだろう。